

「在る愛の夢」

いしづわみな

日々刻々 2025再演ツアー上演バージョン

○登場人物

木野ミミ(きのみみ) 妻 二〇〇九年現在、四十二歳

木野 学(きの まなぶ) 夫 二〇〇九年現在、四十五歳

【第一場】二〇〇九年・春

夫婦が暮らす家。水曜日の夜。

離れのよう建てられた一階に一間、二階に一間の一軒家。間取りは、一階は六畳と二畳ほどの台所、階段の手前にユニットバスがある。縁側に向かって全面ガラス窓、縁側の先には燐に住む大家の家庭菜園があり、その畑の先に二階建ての家がある。これらはイメージとして把握すればよく、具体化しなくてよい。

舞台には三つの空間がある。

夫婦の生活スペースである一階の部屋。二階の仕事部屋には、机とパソコンとキーボード。もう一つは、向かいの家の二階の窓の外の柵に、液体の入った二リットルペットボトルが数本並んでいる。この空間は、場面によつて照明が当たり映しだされる。

*

携帯電話が鳴つていて。

木野ミミ、発信元を確かめ電話に出る。

ミミ ……うん……大丈夫。ちょっと横になつてただけ。起こしてくれてよかつた。——うん日曜日、大丈夫? ——うん、こつちを十一時に出る予定だから、十一時半には着くと思う。車だとすごく近くて、空いてれば十五分かかないって言われた。——ホント? 助かる! ありがとう! ——木野さんはねえ……もうやけになつちやつて……どうにもならない。——うん、話したの一週間前。夕方はいなくて、私が寝たころ戻つてくるし、二回くらいすごく酔つてからんできた。——そう……まともな話ができないの。——わからないけど……引っ越ししてからゆつくり考えるよ。——荷物少ないよ。木野さんが協力してくれたらすぐ片付くんだけね。——置いてくよ。テレビも冷蔵庫も洗濯

機も。——アンプとスピーカーとヘルシオくらいかな。あとせめて iMac は欲しいんだけど…… とりあえず文字入力できればいいから。——ありがとう。——金曜日は有給もらつた。うん、一日だけ。 そうお給料減るから。——引越し祝い？ もらえるの？ —— そうなの！ 実用性重視！ —— 炊飯器はもう買つた。—— うん、死ぬかもしれないよね。言われたよ、死ぬつて。君が出て行つたら死ぬつて。—— 怖いよ。怖いけど(大きく息を吸つて吐き出す)もう祈るしかないよね。(「仮に死んだとしてもミミのせいじゃないよ、そう思つちやだめだよ！」と言われる)わかつて。うん、ありがとう。

木野学が帰つて来た気配がする。

「帰つてきた！ じや日曜日に。またメールするね。

木野、入つて来る。

瘦せていて顔色が悪く、足元がふらついている。

怯えた猜疑心の強い目つきのなかに、知的でユーモアのある優しい人柄と弱々しい視線が見え隠れする。

木野 まだいたんだ。もう出て行つたかと思つたよ。

木野 ミミ 日曜日だよ。言つたよね？ 日曜日の十一時に引越し屋さんが来るから。

木野 ミミ ……(何かを言いかける)

木野 ミミ ね、iMac は持つて行つていい？ ノートはダメでしょ？ なにか書けるものがないと困るから…

木野 ミミ エンピツで書けば？ そもそもあなたアナログな人なんだから。

木野 ミミ ……。

木野 ミミ いいよ、持つていきなよ。でもプリンターないと印刷できないけど、どうする？ プリンターはないと俺も困るしなあ。

木野 ミミ いいよ。そのうち買うから。

木野 でも困るでしょ、コンクールに応募するときとか。USB メモリーに入れてキンコーズとかで印刷す

るつて方法もあるけど、わかる？

ミミ（首を横にふる）

木野 あなたには無理か。水もらえる？

ミミ ミネラルウォーター買ってこようか？

木野 水道でいいよ。

ミミ、水を汲んでくる。木野、差し出された水を飲む。

木野 ありがとう。

木野 お酒、におうね。

木野 酒じやないよ、死臭だよ。

ミミ え？

木野 変な臭いしてるらしいんだよ、おれ。ほらこの前の花見のとき、キノさん変な臭いがするって話してるので聞こえちゃつたんだよね。ちょっとヤバいんじゃない？って。確かにヤバいんだけどさ。キヤツチボールも出来なくなつてたもんなあ…… 風に吹かれてるみたいって言われてたけどさ、ほんとに飛ばされそだつたんだよ。

ミミ ……。

木野 モリオ、憶えててくれるかな：大人になって、黄色い顔の死にそうなおじさんとキヤツチボールしたつて、思い出してくれるかな？

ミミ 思い出すよ。きっと憶えてるよ。

木野 だといいなあ。

ミミ どこで飲んでたの？

木野 図書館の前のベンチとか。サミットの前のベンチとか。やっぱりスーパーの前はいいよね、足りなかつたらすぐ買えるし…… 金ないの知ってるでしょ。大丈夫、職質されるのは慣れますから。勧め人じやないから会社に連絡されることもないし、うつ病で肝硬変で働けないのでヨメが出て行きそぐなんですよーなんて話すと優しくしてくれるお巡りもいるからね。あいつらに同情されるようじや、おれもお終いだよな。

——なんで？ なんでそうなるの？

(欽ちゃんの口真似) なんでそうなるの！

吹っ切れたみたいだつて言つてたじやない？ もう大丈夫だから安心してつて言つてたよね？

いつの話？

木野 病院で。入院してた時。

木野 入院してた時のいつ？

木野 一昨年のお正月。レイコさんやキヨウコちゃんがお見舞いに来てくれて、そのあと二人で：

木野 ああ！ 窓から富士山見えて、みんなが無邪気に盛り上がってたときね。

木野 ……。

木野 まあ俺も富士山見えてきれいだなつて感動して調子のいいこと言つちやつたんだな、これが：

木野 肝臓は元に戻らないんだよ。

木野 沈黙の臓器だから。

木野 そうやつてどんどん寿命縮めてるんだよ。

木野 わかつてますよ、あの病院の肝硬変発症最年少記録つて言われたもんな。おれ、すごいな。

木野 食道も胃も静脈瘤が破裂して何度も出血したんだよ。もうちょっとで死んでたんだよ！

木野 いつそ死んでたらよかつたよな。そしたら君だつてさつぱりしたのにな。

木野 どうさつぱりするの？

木野 相続放棄して借金もチヤラになつて。おれの親の面倒とかみる気もないだらうからさつさと籍も抜いてさ。すつきりさつぱりできたのにな。まあ、君の兄貴も父親もお母さんもめんどうな人たちだから、それだけでも十分大変だらうけどさ。

木野 (堪えて) 福岡には連絡してくれたの？

木野 ……。

木野 わかった、やつぱり私から電話するね。

木野 それは止めた方がいい。

木野 だつて木野さん、かけにくいでしょ。

木野 そりやあかけにくいですよ。でも君嫌われるからさ。

木野 ……。

木野 気にするな、君のせいじやない。

木野、二階へ行こうとする。

木野 写真のデータはできた?

木野 結婚式のだつけ?

木野 ニューヨークの。

木野 オーケー、今からやるよ。

木野 お願いします。あとね、ノートにしか保存してない戯曲があつて…

木野 万が一間に合わなかつたら送るから、引越し先の住所教えといで。

木野 教えたくないか。どうせ君の友だちから、キノさんストーカーになるかも知れないから教えちやだ

木野 メ! とか言われてんだろ。

木野 すごい言われてる。

二人、笑い合う。

木野 じやサキちゃんに渡すか送るかするから受け取つて。

木野 わかつた。

木野 結婚式のはいらない?

木野 いらない。

木野 残念だな。

木野、二階へ上がつていく。

やがて、机に向かい作業をする木野の姿が浮かび上がる。

木野 5年前、私は駅五つ先の友人のマンションに身を寄せました。おそらくもう戻ることはないだろう

という心境で、この家を出ました。2004年4月の終わりのことです。木野さんは泣きながら……
木野 なんかさあ、君、おれと結婚して楽しいことあつた？ なんにもないよなあ？ そう思うと悲しくて……

ミミ なんにもなくないよ！ 楽しいことあつたよ！

木野 いつ？ どんなこと？

ミミ ほら、鳥山に住んでたとき、シミズヤで青島ビールがすぐ安くたくさん買って飲んだじゃない？

木野 そんなことかよー

ミミ ……よけいに泣かせてしまった。もちろん、楽しかったことは他にもたくさんあつたのに、どうして青島ビールだつたんだろう（小さく笑う）。——コールセンターの仕事は週五日、五時に仕事が終わって、六時前に最寄り駅に着きます。駅前のスーパーで夕飯の買い物をして、甲州街道を八分ほど歩いて、環八との交差点を渡つてすぐ右に小さな公園があります。近道になるその公園の脇の小道まで来ると、すうーっと涙があふれてくるのです。悲しいとか苦しいとか感じてるわけじゃないくて、むしろ空が青いとか葉っぱがきれいだなとか思つてているのに、涙の壺を開けてしまつたように涙はあふれ出す。次の日も、その次の日も、毎日毎日。

ミミ、一つの箱を開け、中にあつた白い靴に目を留める。

あの日、あなたがあんまり泣くので、私はどうしても一人で出て行くことができなかつた。じゃあ鳥山まで見送つて！ 窓際の席から通りが見えるあの喫茶店でお茶を飲んで、それから別れよう！ そして私たちは隣の駅の喫茶店でお茶をのんで、もう一度いっしょに改札をくぐつた。あなたはまたボロボロ泣いていて、私はいけないと思ひながらも、一度と会えないわけじゃないんだから、サキちゃんちに行くだけなんだから！ そう言つて、自分も涙が止まらなくて、こんなに別れるのが辛い二人が別れるのは間違つてゐるんじやないかと思えてきて…… でも戻つても出口はない、こうするしかないんだと自分の心に必死で言い聞かせて、あなたの泣き顔を無理やり振り切つてホームに駆け上がりた。反対側のホームの一番端つこのベンチに座つて泣き続けるあなたの姿を横目で追いながら、からだが引き裂かれるような痛みとともに、胸が高鳴るような高揚感があつた。——幸せの高揚感。自分が確かに、間違いなく求められているという確信。必要とされているという幸せ。生まれて初めて感じ

た。幸せの高揚感。

木野、ふと立ち上がり、ベルトを外し、そのベルトで軽く首を絞めてみる。

恐怖と自嘲。

ミミ、白い靴をしまう。

ミミ 私は気がつきました。この気持ちが、この気持ちこそが、どんなに追い詰められても、色々な人からもう別れた方がいいと言われても、私を彼のところに縛りつけた。この気持ちこそが私が木野さんから離れられなかつた理由そのものなんです。

【第二場】二〇〇七年・春 ふわふわと立つてゐる

心療内科クリニックの一室。

木野、ここではミミの主治医カワイとして、穏やかな口調で彼女の話に耳を傾ける。

ミミ 病院の栄養士さんから退院してからの食事についての指導を受けて、私はとても張り切つていました。たぶん、食事制限のサポートを完璧にこなすという目標を持つことで自分を支えていたんだと思います。でもあの日、仕事部屋に隠してあつた焼酎の紙パックを見つけて、退院してからも夫がお酒を飲み続けていると知つて、とにかくここから離れなきやいけないような気持になつて、裸足のまま飛び出してしまつたんです。ここにいやいけない、ここから逃げないといけない、そう思つて、どんどん走つて……。私そんなに走つたり全然できないんですけど、そのときはものすごいパワーが出て走れたんです。それまで見たこともないような速さで景色が通り過ぎてゆくのが見えました。どんどん走つて、走つて走つて、気がついたときには二つ先の駅の、でも駅からだいぶ離れた住宅街にいたんです。

医師 それでどうしました?

ミミ 困りました。

医師 困るよなあ。

辺りはすっかり暗くなつていて、道もよくわからなくて、そのころには足の裏も痛くなつて……
そうだろうなあ。

心細くて、ものすごく彼に会いたくなりました。おかしいんですけど。
それで？

電話をしたくて、自動販売機の下を覗いて小銭を探しました。

（笑つて）よく知つてたね。

子どものころ、したことがあつたんです、そういう遊びを。
見つかつた？

20円だけ。でも電話をかけても出なかつたんです。途方に暮れて座り込んでいたら、その公衆電話が鳴りだしたんです！　夫から電話がかかってきたんです！

もしもし？

医師

木野、白衣を脱ぎ、靴を探す。

やがて白い靴の箱を手にして交差点に立つ。

それで、タクシーで帰つておいでつて、タクシーが通りそうな道を教えてくれて……　だいぶ時間がかかりましたけど、なんとかタクシーをつかまえて。タクシーに乗るとほつとして、あんなに辛い気持ちになつて、あんなに走つてくたびれ切つてゐるのに、家に帰れるとと思うとほつとしました。甲州街道と環八の交差点の辺りに近づいてくると、ふわふわと立つてゐる彼の姿が見えました。ふわふわと揺れながら、私の靴を持って立つっていました。

木野　おかえり。
ミミ　ただいま。

木野、箱のふたを開ける。

白い靴を見て愕然とするミミ、裸足のまま帰宅する。

木野、ミミの足を蒸しタオルで包み、擦り傷を刺激しないように注意して、優しく丁寧に拭く。そ

の温もりに混乱するミミ。

木野 血が出てる。

木野、オキシドールを取りに行く。
ふとミミの目に何かが映り、その視線の先には向かいの家の二階の窓の柵があり、そこに並んだペットボトルをじっと見つめて居る。

木野、その姿にヒヤリとし注視する。

ミミ ねえ、また増えたと思わない？

木野 そうかな……

木野 ミミ 大家さんの息子さんね、そこの畑で取れた野菜、ぜつたい食べないんだって。
木野 ミミ 繊細なんだね。おれたち喜んで食べてるよな。

木野 ミミ あれ、いつ捨てるんだろうね？ ここに十年住んでるけど遭遇したことないよね、捨てるところ。
木野 ミミ トイレに捨てるんじやないの？

木野 ミミ トイレに捨てるんなら、最初からトイレに行くんじやない？
木野 ミミ 面倒なんだよ。あのオヤジ、たいてい酔っぱらってるし……

木野 ミミ 酔っぱらってるのにペットボトルに入れられるつてスゴイよね。
木野 確かに。

ミミ、まだペットボトルをじっと見つめている。
そのミミを不安そうに見つめる木野。

木野 ミミ ほんとうにごめんなさい。
木野 ミミ ……。
木野 ミミ ……。

木野 おれ、酒やめるよ。

木野 ほんとに？

木野 やめる。

それは何度も繰り返されてきた会話である。

木野 やめるよ。今度こそ。

ミミ 惡いの。こんなこと繰り返してたら、私ほんとうにオカシクなっちゃうじゃないかって。もうオカシイのかも知れないけど……。今度またあの時みたいに……あの時みたいに寝つきになつたら、もうほんとうに、今度は戻つてこられないかも知れないと思うの。

木野 大丈夫。そんなことにはならないよ。

ミミ どうしてそう言えるの？

木野 ……。

ミミ あの時だつて、サトウくんがあんなふうに死ななかつたらどうなつてたかわからないんだよ。サトウくんが突然死んで、結果的にはショック療法みたいによくなつたけど……。今になつてよくわかる。

自分がとても危険なところにいたんだつて。

木野 —もしサトウくんが死んでなかつたとしても、きみは元気になつてたよ。もっと、ずっと時間がかかるつたかも知れないけど、でも間違いなく恢復してる。俺にはわかる。

ミミ (木野を見つめている)
木野 やめるよ。約束する。

ミミ ほんとに？

木野 ほんとに。

ミミ お酒さえやめてくれれば、いつしょにいられる。お金のことはなんとかなると思うの。なんとかするから。私は元気になれば働けるし……。

木野 (うなづく)

ミミ 木野さんといつしょにいたい。

木野 うん。

ミミ (泣きそう)木野さんがいないと、私また一人ぼっちになっちゃうんだよ。ほんとうに一人ぼっちなんだよ。誰もいないんだよ。

木野 そうだよな。ごめん、悪かった。ほんとにごめん。

木野 (うなづく)

木野 着替えておいで。冷えただろ?

ミミ うん。

ミミの姿が消えると、木野、待ちかねたように、隠しておいた焼酎を取り出して飲む。

木野が焼酎を隠し終えたところに、ミミが戻つて来る。

木野、ミミが着替えていないことに気づき、「どうした?」と声をかけようとした瞬間――

ミミの手にある紙袋に気づいて、凍り付く木野。

ミミ、力が抜けたように座り込む。

紙袋から、チューハイやハイボールの空き缶が転がり落ちる。

ミミ (微笑みかけ)大丈夫よ。今日はもう走れないから。

辺りがゆつくりと薄暗くなるとともに、向かいの家の二階の窓が映し出される。液体の入ったペットボトル、闇夜の月のように輝いている。

【第三場】二〇〇九年・春

やかんが沸騰する音。

夫婦が暮らす家。金曜日の朝。

柔らかな五月の朝の日差しが、体を丸めて眠つているミミの姿を照らし出す。

ミミ、珈琲の香りに目を覚ます。

木野 おはよう。コーヒー淹れたけど飲む?

ミミ 〈戸惑いつつ〉ありがとう。

木野 牛乳いれるよね?

木野 入れる。

木野 たつぱり?

木野 たつぱり。

木野、カフエオレと一緒に、食べやすく切ったベーグルを載せた皿をミミの前に置く。

ミミ (驚いて) ベーグル! どうしたの?

木野 上北沢にできた新しい店。知つてた?

木野 買つててくれたの?

木野 いやなら食べなくていいけど。

木野 食べる食べる。ありがとう。

ミミ、ベーグルを頬張り、カフエオレを飲む。

ミミ (喜んで) レーズン入つてる。

木野 思い出すな。たしかにニューヨークで食べたときは美味しいと思つたけどさ、君があんなにハマると
は思わなかつたよ。——俺たち、金ないのにけつこうあちこち行つたな。

ミミ そうだね。

木野 どこが良かった?

ミミ ——門司。

木野 門司かあ……跳ね橋みながら飲んだビール、美味かつたなあ。
ミミ 美味しかつた。

木野 ここに住みたい、ここで暮らせたらいいのについて言つてたよね。
ミミ のんびりしていい町だつた。ちよつとマカオみたいで。
木野 みやげものの店で時給いくらか聞いてたよね?

ミミ 水のある風景つてあきないよね。

木野 小樽もよかつたね。

木野 小樽ホテル、なくなっちゃったね。

木野 運河見ながら飲んだビールが美味かつた。そうだよ！ 北一硝子の店でも聞いてたよ。

木野 なにを？

木野 だから時給。あなたいつも聞くんだよ。旅先で。時給とか家賃とか： 子育て支援とか高齢者対策とか……

ミミ 函館もよかつた。すべてが真っ白になつて遭難するかと思つたけど。きれいだつたな、ユトリロミたいで。

木野 函館は地ビールが美味かつた。

ミミ あの店！ 地ビール買つて帰ろうとしたら、止めた方がいいって……

木野 遠くに運ぶとまずくなるって言われて…… また来ればいいって。

ミミ 商売つ気ないマスターなのね。

ミミ ――木野さん、昔からお酒強くて全然酔わなかつたから、急激にからだ悪くなつて、びっくりしたよ。

木野 ごめん…… あなたは全然飲まなくなつたね。

ミミ だつて…… 私飲むと木野さん飲みたくなるでしよう？

木野 まあね。

ミミ どつちにしても飲むか。

木野 君は、旅に出るといつもすごく元気だつたね。

木野 東京が好きじやないから……

木野 未だにスクランブル交差点で混乱するしな。

ミミ むかし木野さんの取材に便乗してあちこち行つて、木野さんは本気にしてなかつたけど、あたしは

木野 本気でどこかへ移り住みたかった。そういうきつかけを探してた。ずっと。

木野 ミミ、ここに越す時だつて、ほんとはもつと郊外にしたかったけど、23区じゃないと仕事取れないとか言うから…… 今さら話してもしようがないね。——ごちそうさま。

木野、立ち上がるうとするとミミを制して皿を受け取る。

木野 今日とか明日とか、誰が手伝いに来るの？

木野 ミミ、誰も来ないよ。

木野 どうして？

木野 ミミ、みんな、つらいと思うから。

木野 そうか…… そうだな。

木野、ミミに『海辺のカフカ』の本を差し出す。

木野 ミミ、これ持つていきなよ。

木野 いいよ。

木野 ミミ、ほんとは大橋さんのリトグラフあげたいけど……

木野 ミミ、いいよ！ 木野さんのたつた一度のボーナスで買つたんだもん。

木野 ホンとうに一生に一度のボーナスだったな。もつと続けられればよかつたんだけど…… あの社長には耐えられなかつた。ごめんな。

ミミ、具合が悪くなつたら意味ないよ。

木野 木野、——夫婦で絵を買いに出かけるつて、なんて贅沢で幸せなことだらうつて、あのとき思つたよ。

ミミ ワクワクしたね。他にはないワクワク感だつたね。

木野 持つて行きなよ。ちょうど一年前くらい？ やつと本が読めるようになつて、あなたこればっかり

読んでたじやない。

ミミ、元気になるから。

木野 やつぱ四国へ向かう話だから。

木野 そうかもね。

木野 高知の山の奥にも行くしね。

木野 うん。

木野 父親殺しの話だしね。

木野 。。。

木野 ごめん、今のは失言でした。

木野 。。殺したいと思つてたよ。昔はね。どつちが殺すかお兄ちゃんと相談したりしてたもん。
(苦笑)兄貴やりかねないからな。——座布団ぜんぶ持つてく?

木野 座布団?

木野 もともと君のだから申し訳ないけど、少し置いていってくれるとありがたい。

木野 いくつ?

木野 二枚。横になるからさ……

木野 枕の分も入れて三枚置いてく。

木野 助かる。

木野 ごほんの後は、必ず横になるようにしてね。先生に言われたでしよう?
木野 わかつてる。

木野 その座布団は父が買って持つてきたの。結納の時、六枚セットで。

木野 ふざけた人生送つてるくせに、ところどころ妙に折り目正しいよな、あの人は。

木野 ——木野さんが緊急入院したときね、

木野 うん。

木野 その前にもう別ようつて決心してたんだけど……

木野 その前つて、いつごろ?

木野 夏の終わり……秋の初めくらいかな。

木野 二〇〇六年だよね?

木野 そうだね。

木野 君が会社にも行かず書き続けてたときだ。

ミミ ……父親に言われたの。

木野 なんて？

木野 こういうことになつたら別れるというのは酷なんじやないかつて。九死に一生を得たんだから、さすがに学くんも変わるだろうしつて。夫婦でいてもいいんじやないかつて。

木野 心外だな。

木野 同情したのかな？

木野 最悪だな。

間。

木野 ウエディングドレスは置いていくなよ。

木野 ……。

木野 持つても困るか。次は同じの着れないもんな。

間。

木野 あのさあ……

木野 やっぱりニューヨークかな。

木野 え？

木野 一番よかつたのはニューヨークだね。

木野 そうだね。

木野 びっくりしたよね。なんであんなに元気になつちやうんだろう？

木野 なんでかな。日本では瀕死状態だつたのにな。

木野 魔法みたいだつたね。

木野 うん。

木野 街を歩いてるだけで楽しくて。

木野 うん。

木野さん、急に英語しやべりだして…。

あなたはほとんど日本語なのに、妙に通じるんだよな。

絶対必要なことは憶えてたよ！

木野 今日のチケットはありますか？

木野 Are todays tickets still available?

木野 イサム・ノグチ美術館には、どう行けばいいですか？

木野 How can I get to Isamu Noguchi Garden Museum?

木野 よくぞおもした！

木野 Does this go to Ground Zero?

木野 ……。

木野 ずっと聞きたかったことがある。

木野 うん。

木野 グラウンドゼロに行つたときの、憶てる？

木野 二〇〇二年だね。

木野 あのとき、私たちに声をかけてきた記者さんがいたでしょ？

木野 たぶん中東のね。

木野 私、よくわからなかつたけど、あのひと私たちに何か尋ねてきて、木野さんが応えたら急に口調が

激しくなつて…… 木野さんも言い返すみたいな感じになつて。私怖くなつて、アイムソーリーって

謝つて木野さんを引っ張つて…… あの人、なんて聞いてきたの？

木野 ……。

木野 あの人ね、怒つてたと思うけど、すぐ哀しい目をしてたの。木野さん、なにを言つたの？ どうしてあんなに怒つてたの？

二人、記憶のなかでグラウンドゼロに立つてゐる。

木野 ——俺の魂は、あそこにあるような気がするな。

木野、出て行く。

ミミ、一つの箱を開ける。現れたのはウェディングベールとブーケ。

【第四場】一九九四年～一九九六年 穴の開いた小舟に乗つて外海へ漕ぎだす

一九九四年・晚秋。

柔らかな木洩れ日揺れる樹々の影。
蝶ネクタイを身に付けた木野が登場し、正面に向かつて深く一礼、そこに集まつた人々の顔を見渡す。

木野——えー今さらですが木野学です。本日はお忙しい中、ここに参列くださいましたこと、深く御礼申し上げます。先ほどマイクのテストをしていたら、手洗いはどこかと尋ねられまして、顔を見たら十年ぶりに会う父方の叔父でした。こここのスタッフと思われたようです。皆さまには、受付でお一人お一人に今日の立会人としてサインをしていただきました。ありがとうございました。本日は、人前式での結婚式を行います。仏様でもキリストでもなく、皆さまに結婚を誓い、新しい一步を踏み出したいと思います。なにぶん私たちも初めてのことで色々と至らない点もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。六月に結納をしたんですけど、彼女のお父さんが、木野ミミっていうのはおかしいんじやないかってばやいてまして……すみません、とくに落ちもないんですけど。それでは、私の妻となるミミをご紹介したいと思います。

ワーグナーの結婚行進曲のピアノが聴こえ、ベールを付けブーケを持つたミミが、緊張した面持ちで登場する。
ミミは木野の横に並び、二人で「結婚誓約書」を読み上げる。

木野・ミミ 私たちは、本日ここで、参列された皆さまを証人として、結婚することを誓います。この先の長い将来、病めるときも、健やかなるときも、夫婦としてお互いにお互いを支え、励まし、一番の味方となつて、一人で幸せな人生を過ごせるよう、努力を重ねてゆくことを誓います。一九九四年十

一月三日。

木野
木野学。
岡本ミミ。

木野とミミ、挨拶しながらゆっくりと去り、ミミ一人だけ椅子に座る。

そこは、花嫁の控室。

木野、ここではミミの母親として入つて来る。

母親 あんた、お兄ちゃん礼服やないで。ふつうの背広で来ちゅう……あの子、礼服持つてないろうか？

あんたなんでいつしょに借りちやらんかつたあ。

ミミ ちやんと持つてるよ。わざとでしょ。

母親 ミミ いいよ、堅苦しくない式なんだから。

母親 けんど向こうは親戚の人らあもおるし、見る人は見るぞね。

ミミ 木野さんの妹さんだつてワンピースだつたでしょ？

母親 ミミ あんた、あれはミュウミュウで！

母親 ミミ なにそれ？

母親 ミミ プラダの妹みたいな。

母親 ミミ プラダつて妹いたんだ。

間。

母親 お父さん、お祝いくれた？

ミミ もらえると思ってないよ。

母親 （呆れて）おじいちゃんに頼めばえいにねえ、娘のために頭下げられんろうかねえ……

おじいちゃんからはお祝い届いたよ。

母親 なんぼ？

ミミ 十万円。

母親 あんた少し融通してくれん?

ミミ (警戒しつつ) 飛行機代と着物レンタルと着付けと美容室と、その帶揚げでもう十万円以上かかっちゅうきね。

母親 あんたが買うてくれたこの帶揚げはえいけんじ、着物が安物やけんねえ…… 向こうのお母さんの留袖、古いけど格が高いわ。黒の深さが違う。あたしもえいがを持つちよつたけんじねえ……

ミミ 質屋で流したきねえ。

母親 他にもお祝いが入るろう?

母親 それは式の費用になるがやけん。

母親 費用は木野さんとこが出するう?

母親 うちは一銭も出してないがで。ようそんなことが言えるでね。

母親 いつたんは木野さんの親に借りるけんじ費用は自分らあで出すがやろう? あんたそう言いよつたでねえ?

ミミ ……。

母親 まあ、また後で相談するわ。

母親、出て行く。

ミミ、不安な面持ち。

木野、入つて来る。

木野 どうした?

木野 お母さんが…… お金貸してつて……

木野 (笑つて) 今回は大人しいかと思つたけど、さすがお母さんだねえ。

木野 絶対返つてこん。

木野 後で相談しよう。俺から話してもいいし。
ミミ 貸して欲しかつたら返してから言え!

木野

大丈夫、ずっといるわけじゃないんだから。一、三日したら帰るんだから。何とかなるよ。

木野

(間あって)もう木野ミミだもんね！

木野

そうだよ！ 新型ミミだよ。

木野

やつたー！

二人、抱き合う。

ミミ、参列者に語りかける。

木野、蝶ネクタイを外し、煙草を吸い始める。

ふと気づくと、結婚行進曲は変調し、やや落ち着かない旋律になつていて。

ミミ 皆さま、今日は本当にありがとうございました。ここでご紹介させていただきます。今日私が着ているウェディングドレスは、中学からの親友、森サキ子が製作したものです。一緒に生地を買いに行って、デザインして作ってくれました。サキ子、ありがとう！ それから、先ほどの式でピアノを弾いてくれたのは、私の劇団でいつも音楽を作ってくれているミヤモトマコトくんです。ミヤモトくん、ありがとうございます！

ミミ、白い靴を脱ぎ箱にしまう。

木野、煙草を吸つている。

ミミ ——木野さんは子どもを欲しくないと言つた。

木野 子どもは嫌いじゃない、むしろ好きだよ。でも自分の子どもは欲しくない。

ミミ どうして？

木野 自分のことが嫌いなんだよ。憎んでると言つてもいい。自分に似ている子どもを見るのは耐えられない。

ミミ でも…… でもお正月福岡に行つたとき、子どもの名前の話してたよね？ 木野さんが、女の子だつたら木野サクラにしようつて言つたらお父さんが本気にして怒つて…… 木野ミキとか、木野タクミとかみんなで盛り上がつてたよね？

木野 あれはまあ、世間話としてというか。

ミミ（心の声） ふざけんじやないわよ！ 何だよそれ——それでもあたしは諦めなかつた。

ミミ でもさ、あたしそつくりの子どもが生まれる可能性もあるよね？

木野 （微笑） それはいいな。

ミミ、ベールを外し箱にしまう。

——木野さんは、ときどき死にたくなるのだと言つた。

木野 自分なんか消えてしまつた方がいいと思う……と言つた方がいいかな。

ミミ ……自殺しようとしたこと、ある？

木野 それはない。

木野 （安堵する）

木野 駅のホームで電車待つてさ……

木野 うん。

木野 電車が入つてくるアナウンスが聞こえて、いつの間にか…… いつの間にからだが線路の方へ向か

つてることがあるんだよね。自分でもびっくりするんだけどね。

間。

ミミ ——うちの自殺した伯父の話、憶えてる？

木野 お父さんのお兄さんだよね。いつだっけ？

木野 私が中三のとき。

木野 お父さん、全然驚かなかつたって言つてたよね。

木野 何度も未遂してたから、いつかやると思つてたつて。

木野 お父さんのお姉さんもだつたよね？

木野 大学三年のとき。

木野 やつぱり驚かなかつたの？ お父さん。
ミミ すごい落ち込んでた。
木野 へえー
ミミ（心の声）早く言えよ！ 何だよそれ——それでもあたしは恐れなかつた。
ミミ 今度消えたくなつたらさ、一人でぴつたりくついて、それが過ぎ去るまで待てばいいんだよ。ね、
木野 そうしよう！
木野 ありがとう。
天 二人、横になる。
ミミ、当然のように木野の胸の中におさまろうとするが背を向けられてしまう。
夜が更けていく。
木野 そこに共通性はあるのかな？
木野 ミミ……？
木野 自ら死を選んだ伯父さんと叔母さんについて。
ミミ 木野 ——わからない。
木野 わからぬいよな。
木野 ミミ わからぬいし、不用意なことは言えない。
木野 うん。
木野 ミミ でも、三人兄弟で二人が自ら死を選ぶつてことは、何らかの意味があると思う。
木野 うん。
木野 ミミ 人生に対する諦めと復讐…… みたいなものがあるのかも。
木野 うん。
木野 ミミ 人の死に理屈つけちゃいけないんだけど。
木野 あきらめとふくしゅう。
木野 なるほど。
木野 ミミ 復讐…… は言い過ぎかも知れないけど。
木野 木野 そういうことかもな。

ミミ ……？

木野 君のお父さんは死ぬことを選ばなかつたけど、酔っぱらつてお母さんにひどい暴力をふるい続ける

という形で…… いちばん大切な人を痛めつけるという形でそれが表れた…… ということかもな。

ミミ 母もあんなに耐えなくともよかつたのにね。もつと早く見切りつけてたら、また別の人生があつたかも知れないのに…… むかしは母のことが好きだつたから、父親に殺されるんじやないかつて、毎晩ほんとうに不安だつた。

真夜中の静寂。

木野、静かに起きだし、身支度をする。

ミミ そこまでにしておけばよかつた。そう、死にたくなるときがあるんだね。つらいよね。私は死なないで欲しいと思つてるよ。それを忘れないで。そう伝えるだけにしておけばよかつた。どんなに不安でも、どんなに怖くても、家で待つていればよかつた……。

木野、出て行く（まだ姿は見えている）。

ミミ、起き上がる。

木野の姿、消える。

ミミ、飛び起きて脱兎のごとく駆け出してゆく。

【第五場】一九九六年～一九九八年 さまよえる魂

一九九六年・秋。

木野、夜更けの幹線道路を歩いている。やがてミミが現れ、木野の姿を見つける。

ミミ、少し離れて後をつけて歩く。

ミミ 伯父は、生まれ育つた土地の山へ分け入つて、自らの手で自らを殺した。その木にぶら下がつた伯

父の肉体を見つけたのは伯母で、彼女は自分の手で夫の体をその木から下ろした。伯父の鼻からは大量の鼻水が放たれていて、生きていた証しとも言えるその鼻水を、自分が拭つたのだと話してくれた。

甲州街道の歩道橋の上にたたずむ木野と、その姿を見つめるミミ。

ミミ 伯父が最後に選んだ木は、どんな木だったのだろう。栗の木なのか、楠の木なのか、それとも桜の木なのか。この辺りには首を吊りたくなるような木はない。もしも：もしも木野さんが自らを殺してしまうとしたら、どんな方法をとるだろうか。

木野、再び歩き出し、ミミはその姿を追い、二人は闇に消える。

夜が明けてゆく。

ミミ、電話をかけている。

ミミ ——お義母さん、すみません。申し訳ありません。私の力ではどうにも出来ない問題が起こつてしまつて……昨日、偶然大家さんの奥さんに会つたんです。そしたら家賃を六か月払つてないつていうんです。——それが、私は一度も払いに行つたことがなくて……学さんが自分が払うからつて、家で仕事してますし、払つた？て聞くと、いつも払つたつて言うので全然知らなくて……すみません。——はい。八〇万くらいです。——とりあえず、四、五日待つてくださいつてお願ひして……はい、待つてくださるそうです。——お義父さんがですか？はい、はい……わかりました。

座布団が一枚置かれ、その向かいに一枚置かれている。

ミミ 翌日、福岡から木野さんのお義父さんが上京してきた。木野さんは罪を認め審判を待つ被告人のよううにうなだれ、一言の弁明も口にしなかつた。

木野、ここでは木野の父親として入ってきて、座布団に座る。

ミミ、木野が座つているらしい横に座る。

父親 (封筒を差し出す) ジやあ、これでいいね、学くん。

畠に額をつけるように頭を下げたらしい木野を見て、ミミも同じように頭を下げる。

父親 そんならビールでも買うて来ようかね。

父親、出て行く。

ミミ それから私は仕事帰りに不動産屋を回り、なんとか木野さんがうんと言つてくれる家を見つけ出した。大正八年に巣鴨から移された6万坪の敷地面積を持つ精神病院のある駅から徒歩十分。甲州街道と環八の交差点から北西へ少し入ったところ、世田谷区と杉並区の境目にある小さな一軒家。隣には大家さん家族が住んでいた。ご夫婦と旦那さんのお母さん、中学生と高校生の息子さん。犬小屋にはトビーがいた。トビーは吉祥寺から大家さんについて来たという迷い犬で、木野さんによく懐いた。

木野、入つて来る。

木野 また境目だな。

ミミ ……?

木野 世田谷区と杉並区の境目なんだよ、ここ。前のところは、世田谷区と調布市の境界線だつたしさ。俺たちの大学の敷地も、東京都町田市の所と神奈川県川崎市の所が入り乱れてたし：俺たち、ずっと境界線にいるんだな。

ミミ そうか、面白いね。あのね、これからのことと相談なんだけど。

木野 (身構える)

ミミ 一応ね、これからは私が、いちおう私が家計の管理をしようと思うの。今まで木野さんが家賃払つて、私が食費とか光熱費とか払つてやつてたけど、やっぱり、だいぶ切り詰めないといけないし：これからはギヤラが入つたら、いつたん渡して……

木野 このままにして。ちゃんとするから……

木野 でも……

木野 (怯えたように)払うから! 家賃はちゃんと払うから!

木野 違うよ! そうじゃないよ。一人で払えばいいんだから……

木野 もう大丈夫だから! ゴメンナ。

木野、出て行く。

ミミ それでも、私は一仕事終えたような気持で、ここからが本当の結婚生活だと思つていました。築三十年、一階に一間、二階に一間、このささやかなわが家で等身大の暮らしをすればいいのだと胸をなでおろしていました。

ミミ、仕事から帰宅する。

木野、入つて来る。

木野 おかえり。

ミミ ただいま。今そこで大家さんに、トビーが主人にすつかりお世話かけてつて言われたけど何?

木野 今日カミナリすごかつたじゃない?

ミミ うん。

木野 トビー、カミナリがすごい怖いみたいでさ。ちょうどみんな留守で、犬小屋で怯えて暴れてたの。

木野 そうなんだ。

木野 怖がつて暴れてグルグル回るから鎖が体に巻き付いちやつてさ。

木野 えー 痛いよ。

木野 ほどこうとしたんだけど雷が鳴るとまた暴れてどうにもならなくてさあ… しようがないから一緒に犬小屋にいたの。

ミミ 犬小屋に?

木野 うん、こうやつて抱いてヨシヨシつて。それが一番落ち着くかと思つて。

ミミ　たいへんだつたね。冷蔵庫のコロッケつて……

木野　大家さんからいただいた。そんなわけでビール買つてくるね。

ミミ　コロッケだもんね。いつてらつしやい。

木野　敢闘賞だな。

ミミ　木野　来場所は三役を目指してください。

木野　オツケー！

木野　出て行く。

ミミ　——いいなあトビーは。

一九九七年・初夏。

真夜中の住宅街。線路脇の道を歩く木野と、その姿を追つて歩くミミ。

ミミ　二十年前、棺に横たわつた伯父の顔は、とてもきれいだつた。やつれた風でもなく、痩せたようでもなく、歌舞伎の女形のように色白な、いつもの伯父の顔だつた。でも私の頭に浮かぶのは、その最後に見た伯父の顔ではなく、見てもいない伯父が死ぬ瞬間の姿だ。死にゆく伯父の姿は確かにイメージとなつて焼き付き、私は何度も何度もその映像を思い出して生きてきた。

公園の遊具の上にたたずむ木野。その姿を見つめるミミ。

ミミ　伯父は、いつその一本の木を決めたのだろう。自分の身を委ねるその一本の木。伯父はいつ、その木と出会つたのか。どうしてその木だつたのか。それとも、そんなことはどうでもよく、たまたま選んだ木が、それだつたのか。——木野さんは、いつ私だと決めたのか。どうして私だつたのか……。

木野、駆け降りるように走り出し、ミミはその姿を追う。
二人は闇に消える。

夜が明けてゆく。

ミミ、電話をかけている。

ミミ お義母さん、ミミです。一昨日から学さんが帰つて来てないんです。ずっと携帯にかけてるんですけど通じなくて…… —— 急に友だちの家に泊まつたりすることもあるかと思つて待つてみたんですけど…… でも昨日も帰らなくて、連絡もなくて。 —— 私は昨日は仕事に行きました。今日は休みを取りつて…… 警察に届けた方がいいでしようか? —— そういう荷物は持つていってないです。鞄もあります。 —— お義父さんがですか? はい、はい: わかりました。

ミミ、座布団を三枚置く。

ミミ 翌日、木野さんはお義父さんが上京してくる直前に帰つて來た。

木野、ここでは木野の父親として入つてきて、座布団に座る。
ミミ、向かいにいるらしい木野から少し離れて座る。

父親 (封筒を差し出す) じゃあ、これでいいね、学くん。

畳に額をつけ頭を下げる木野。

ミミ、義父の顔と木野の様子を交互に見つめる。

父親 ミミさん、ビールはあるかね?

ミミ ビールですか?

父親 なけりやあ買うてきてくれんね。

一九九八年・秋

明け方。ベンチで酒を飲んでいる木野を、ミミが見つめている。

木野、ふらふらと帰宅し横になる。

ミミも帰宅するが、休む暇もなく出勤の支度をして出て行く。

ふたたび真夜中。酒を飲みながら歩く木野。

明け方。木野ふらふらと帰宅し横になる。

続いて帰宅したミミ、疲れ果てその場に眠りこんでしまう。やがてミミのからだは白い光に包まれていく。

【第六場】一九九九年～二〇〇一年 絶望の淵でみえるもの

一九九九年・初冬。

ミミ、向かいの家の窓に並ぶペットボトルを見つめている。

ミミ 避難した方がいいんじゃない？

木野
ミミ
…。

木野
ミミ もうすぐ飛んで来るんじゃない？ ここにいたら危険だよ。

木野
ミミ 大丈夫、落ち着いて。

木野
ミミ もうすぐだよ！

木野
ミミ、落ち着いて！ あれは裏のオヤジの小便が入ってるだけで、気持ち悪いけど、爆発はしない。

仮にオヤジが撒き散らしたとしても、そこの煙の肥やしになるだけで、家まで飛んできたりしない。

ミミ 飛んで来るよ。

木野
きみがそう思うのは、ずっとテレビを見ているからだよ。ふだんあんまり見ないのに、こここのとこ

ろづつと見てるから刺激が強すぎるんだ。テポドンのニュースを見てそんな風に感じちゃったんだよ。

ミミ 何もできないから…… 活字も読めないし手紙も書けない。家のことも…… ぼんやりしてるこ

と もできないんだよ……

木野 何かビデオ借りてくるよ。昔のテレビアニメとかもあるし…… 何がいい？ ムーミン？

ミミ —— 今までここにいるの？

木野 ……？

木野 いつまでここに住むの？

木野 引越ししたいの？

木野 こんなに長く住むつもりじゃなかつたの。ともかく家賃の安い所に引越しして、お父さんにお金返さなきやと思ったから……。

木野 俺は気に入つてるよ。大家さんもいい人だし、夜中に仕事しても隣に気をつかわなくていいしさ。でも夜もずっとうるさくて……。

木野 まあ幹線沿いだからね。仕方ないよ。今は具合が悪いから、よけい気になるんだよ。感じやすくなつてるんだよ。

ミミ ……。

木野 帰りにツタヤに寄つて来るよ。

ミミ ……山ネズミのロツキーチヤツク。

木野 オーケー。探してみる。

二〇〇〇年・春。

ミミは終始不安感が強く落ち着かない。本を読んでみようとするが、活字を追うことができず、絶望的な気持ちになつている。

木野、買い物から戻り、紙パックのオレンジジュースを差し出す。

木野 買つてきたよ。とりあえず三個。あと一リットルのを買った。だいぶお得だから。

木野 ……。

木野 小さいのがよかつた？

木野 (うなづく)

木野 一リットルは嫌なの？

木野 (うなづく)

木野 一応、理由を聞いてもいい？

ミミ、なかなか言葉が出てこない。

木野 いいよ、ゆっくりで。

木野 コップに移さないといけないから……

木野 うん。

木野 こぼしちやうかも知れないし……

木野 そうか。

木野 少しづつ飲んでると、ひっくり返すかも知れないし……

木野 そうだね。

木野 ミミ、どのくらい飲んでいいのかもわからないし…… わからないと不安になるし……

木野 そうだね、悪かった。じゃあ一リットルのは俺が飲むから。また小さいの買つてくるよ。

木野 ミミ、……ごめんなさい。

木野 ミミ、このオレンジジュースがいいんだ？

木野 ミミ、前に飲んだとき、ちょっと楽になるような気がしたの。

木野 わかった。じゃあちよつと仕事してから、何かあつたら呼んで（出て行く）。

二〇〇〇年・秋。

木野 ミミ、ある場所を目指して、一歩ずつ、必死で歩いて行く。

木野 そこは、M病院の診察室。

木野、ここでは精神科の若い女医として入つて来る。

木野さん、その後どうですか？

木野 ミミ、つらくて…… とてもつらくて…… どうしていいかわからないんです。

木野 女医 ミミ、睡眠はどうですか？

木野 女医 ミミ、疲れません。でもいつたん眠ると何時間も眠つてしまふんです。

木野 女医 ミミ、夢はみますか？

ミミ 夢見が悪くて……

女医 朝はいつたん起きるようにしてくださいね。生活のリズムを作ることが大事です。

ミミ 目が覚めるのも怖いし、目が覚めないのも怖いです。たいてい怖い夢をみて目が覚めます。

女医 じゃあまたお薬出しますね。

ミミ もうお終いですか？

女医 木野さんはこの病院に来るにはちょっと症状が軽いんですよ。

ミミ わかつています。でもここが一番近いんです。電車にも乗れないし、ここならなんとか歩いて来られるんで。

女医 通つていただきていいんですよ。

ミミ どのくらい悪くなつたら入院できますか？

女医 入院ですか？

ミミ やっぱり手首くらい切らないとダメですか？

女医 一回切つたくらいじゃあ……

ミミ やっぱり敷居が高いんですね。

女医 毎週運ばれてくる患者さんもいますから。

ミミ 毎週ですか……

女医 そんな気持ちになるんですか？ 手首を切りたくなるような？

ミミ 最近たびたび思い出す光景があるんです。そこに帰りたいなつて…… 小さい頃、四十川のほとりに住んでいました。家を出て、トラックが走ると土ぼこりが舞う道を渡つて、堤防への階段を登つたら四十川が見えます。ある日、父がオートバイの後ろに私を乗せて河原を走つたんです。じやりじやりと石ころが広がる河原です。私は三歳くらいでした。オートバイがひっくり返つて、私は石ころのなかへ放り出され、丸いお尻がポンと地面に着きました。父は慌てる様子もなく、ぼんやりとしていました。私は泣きもせず、ぼんやりした父を見ていました。——あのとき、父は死にたかったんじやないかと思うんです。せめて私だけでも死んでいたら…… 父も真面目に生きる気持ちになつて、母と兄と三人で幸せになれたかも知れないって。

夫婦が暮らす家。木野、入って来る。

木野 四月から契約社員になることにするよ。社会保険もあるし、ゆっくり治療できるでしょ。

木野 大丈夫?

木野 なにが?

木野 毎日会社に行くんでしょう?

木野 そりやそりでしょ。

木野 ……。

木野 大丈夫だよ。心配しないで。

二〇〇一年・初夏。

ミミ、部屋に横たわっている。心の中心にとてつもなく大きな不安が棲みつき、自分はこの世界に存在してはいけないような恐怖に脅かされている。生きるエネルギーが枯渇したようぐつたりとして、声もか細くなっている。

木野、優しく呼びかける。

木野 ミミ、サキちゃんが来てくれたよ。上がつてもらうね。

木野 ミミ (激しく首を横にふる)

木野 どうした?

木野 会えないよ。

木野 どうして? サキちゃんだよ。

木野 あたし、臭いから。

木野 そんなことないよ。

木野 ずっとお風呂に入つてないんだよ! 髪なんてべとべとだし、皮膚だつてほら! こうやつてこする

ると粘土みたいなカスが出るの。ほら! 会えるわけないじゃない。

木野 サキちゃんはそんなこと気にならないよ。君たち姉妹みたいなもんじやない。中学の演劇部から一緒

で……

木野 ミミ (激しく拒否)
木野 ……わかった。じゃあ帰つてもううね。

木野 木野、いったん出て行き、戻つてくる。

木野 これお見舞いだつて。

ミミ、小さな花束を目にして哀しみがこみ上げてくる。

木野 ミミ お願いがあります。

木野 ミミ どうした?

木野 ミミ 中村に連れて行つてください。

木野 ミミ ナカムラ? お母さんに会いたいの?

木野 ミミ (激しく首を横にふる)

木野 ミミ ナカムラに行つてどうするの?

木野 ミミ 四万十川に連れて行つて。お願ひ……

木野 ミミ 四万十川に行つたら楽になる?

木野 ミミ わからないけど…… そんな気がするの。

木野 ミミ わかった。すぐにはムリだけど行けるように考えよう。
木野 ミミ お願いします。

ミミ、畳に額をつけるように頭をさげる。

【第七場】 一〇〇九年・春

夫婦が暮らす家。金曜日の昼過ぎ。

木野 荻窪行つてくる。

木野 今日？ 先々週も行つたよね？

木野 サクラ先生からメールあつてき、なんかかなり参つてるらしいんだよね。

木野 ……。

木野 そんなこと言つていいのかつて思うんだけどさ、木野さんと話すと落ち着くつていうからさ。つたく、どつちが患者かわからないよな。

木野 精神科のお医者さんは相性が大事だから、何も言わなかつたんだけどね。私もカワイイ先生に会うまで苦労したし……。でもどう考えてもその先生、医者として好ましくないよね？

木野 君の言う通りだと思うよ。でも精神科つて変な患者も多いじゃない。ほんと大変らしいんだよ。ストーカーみたいなことされたりとかさ。

木野 家族はいないの？

木野 バツイチで独り暮らし。新一年生の男の子の親権、ダンナに取られたらしい。

木野 同情はするよ。でも医療費支払つて通つてるのは木野さんなんだから、いつもいつも先生の愚痴聴いて帰つてくるのは、どう考へてもおかしいでしょ？

木野 先生も、いつも申し訳ないとは言つてるんだよ。奥さんにも申し訳ないつて。

木野 私に？ なんで私に申し訳ないの？

木野 ……。

木野 それなら友人として、病院の外で会えば？ 医療費払うのおかしいでしょ？

木野 でもまあ、薬はもらうわけだから……。

木野 だから、処方箋代もかかつてゐるわけでしょ。もう一か月に一回でいいのに、割高になるんだよ。木野さんの調子が悪くて通院が増えるのはいいの。でも先生の具合が悪くて、通院を刻んで薬ももらうようにするつておかしいでしょ？

木野 でもまあ自立支援で五百円だし……。

木野 自立支援受けて五百円で済むのは公費が投入されてるからだよね。木野さんらしくないね。

木野 ……。

木野 その先生、ちゃんと受診した方がいいと思うよ。患者に頼るんじやなくて信頼できる精神科医に相談すればいいじゃない。

木野 たしかに。

卷之三

木野 そりや、そうできたらいいけどさ… でも先生言つてたじやん、家族は一人しか診ないって。
ミミ 私はもう行かないから。木野さんが行けばいい。カワイ先生に引越しのこと話してきた。薬ももう
止めることにしたの。

木野 何飲んでるんだつけ？ 今……

今 · · · ·

デバス。あと頓服。

木野
大丈夫なの?
急に止めをゆして
……

木野
ミミ
丸三年。
大丈夫なの?
急は止めたりして
……
とのくらい飲んでた?

木野 ほんとに大丈夫?

三三
わからぬ。でもそうしようつて決めたの。

木野 そうか…… カワイ先生、驚いたんじやない？

驚いてた。でも引き留めはしなかつた。

木野 そうか……

木野さんのこと、すぐ心配してたよ。

木野 そうか…… とにかく今日は行くよ。約束したし。

…………… そうだね。ねえ、今月のクレジットの通知見なかつた?

木野 さあ……見てないけど。

——ほんとに？

木野 ほんとに

ミミ 知らない?

木野 知らなれ

そう。——晩ごはん、食べたいものある？ カツオのたたきは？

「ハハハ、いいよお、いいよお！」

不野 美咲子 沢か てもいひ
そつこ そうご。

木野 あなた、離婚してよそで「ピース」はんって言つても通じないよ。木野家だけなんだから、たぶん。

ミミ　離婚は……　まだわからないよ。

密度の高い沈黙。

木野　昨日、話そうと思つてたんだけどさ。福岡で暮らさないか？

ミミ　怯えた表情。

木野　違う違う！　親のところじゃないよ。同居はしない。それはない。向こうでマンション借りてき、東京よりは安いし、門司でもいいし。福岡にも雑誌はけつこうあるし、知り合いもいないわけじゃないし……けつこうイケそうな持ち込み企画もあるんだよ。ギヤラ安くてもいいって言えば、使つてくれるところはあると思うんだよね。福岡ならコールセンターもあるみたいだし、何とかなるんじやないかな。

ミミ　……。

木野　今さらなんだつて感じだよな。君は何度も福岡に行こうつて言つてくれたのに、ずっと拒否してきたから。

ミミ　今さらなんだつて感じです。

木野　そうだよな。よくわかつてます。でも真剣に言つてる。君だつて今の給料でアパート借りて諸々払つて、さらに返済していくのは大変だろうし、ちよつとでも安い所に住めば、その分返済に回せるわけだし……

ミミ　意味わからぬいんだけど。それができれば、今までだつて返済できるはずだよね？　ここの家賃だつて更新の度に安くしてくれてるし、木野さんが……

木野　（強く遮る）わかつてる。だからだよ。

ミミ　……。

木野　ほんとに今さらだけど、やっぱり誘惑が多いんだよな。誘惑つてのもおかしいけど、今までの付き合いもあるし……この前もカズマが來たじやない？　きみが3千円出せないつていうから……：

ミミ　五百万の借金がある夫婦が、五体満足、ただ働きたくないつてだけの人に、働かないのがボリシー

つていうオヤジに3千円あげないでしょ？

木野 カズマはただのオヤジじゃない。ロツクンローラーだぞ！

木野 ……。

木野 とにかく手ぶらで帰せないっていうか、帰れないからさ、あいつ……

木野 結婚指輪、質入れしたんだよね。

木野 ……。

木野 （可笑しそうに）やつぱりそうなんだ。

木野 キノー 電車賃恵んでくれよー って言わるとさ……

木野 ミミ カズマさんじやなければね、三千円くらいあげたよ。カズマさんだから拒否したの。わかつてる？

木野 わかつてるとと思う。

木野 ミミ 昔はね、大学に棲みついて、色んな人に煙草代とかラーメン代とかもらつて暮らしてるとも面白いつて思つたよ。木野さんが言うように、あそこまで卑屈にならずに人にタカれるのはすごいっていうのも、わからなくはない。

木野 憎めないよな。

木野 ミミ でも木野さんが肝硬変で、死にかかるって、収入もまったくなくて、貯金どころか借金しかないつて知つても、あの人タカれるかな？

木野 ……。

木野 ミミ 友だちなら、思いやりは必要でしょ？ ロツクンローラーでも。ちゃんと話さない木野さんが悪いと思うよ。

木野 そうだな。

木野 ミミ だいたいカズマさん、埼玉のどつかにちやんとした実家があつて、学校の先生してたお母さんに時々おこづかい貰つてるんでしょ？ 今までの分、木野さんがタカつてもいいくらいだよ。

木野 だからさ、きみの言う通りなんだよ。だから、そういう知り合いのいない所に行つた方がいいと思つたんだよ。

木野 ……。

木野 高木さんだつて、工藤社長だつて長い付き合いで、俺、ずいぶん無理も聞いたよ。新婚の頃にギャラが遅れて、きみにもずいぶん我慢してもらつてさ、あの時はものすごいしんどかつた。それでも文

句ひとつ言わずにやつてきたけどさあ、俺が死にかけたつて聞いても顔も見せやしない。見舞いも寄こさなかつたもんな。さすがの俺も、つくづくお人よしはバカのうちだと思つたよ。——お人よしはバカのうちつて、名言だよな。きみのお父さん。

ミミ
……。

木野 考えてみて欲しい。今さらだと思うのは当然だし、わかつてゐるけど、考えてみてください。門司でも柳川でも、きみの好きなところでやり直したい。（腕時計をみて）もう行かなきや。帰つたらまた話そう。よろしくお願ひします。

木野、深々と頭を下げ、出かけようとするが、戻つてきて「ガラスの動物園」の文庫本を差し出す。

木野 これは持つてかなきや。

ミミ、『ガラスの動物園』を見つめている。

【第八場】 二〇〇二年・初夏 ここに住めたらいいのにね

ホテルペンシルバニアの部屋。夜。

木野、新しいビールを開ける。

ミミ まだ飲むの？ ちよつと飲みすぎじやない？

木野 こつちはビールが安くていいよなー ごめん、これでお終いにするから。

ミミ 明日早いから心配しただけ。飲めばいいよ。エンパイアステートビル、登ればよかつたのに。行きかかつたんでしょ？

木野 一人で行つてもな。

ミミ ごめんね。高いとこ苦手で。高速エレベータも耳痛くなるし。一分で八十階は恐ろしい。

木野 おみやげ揃つた？

ミミ うん。会社の人はみんなチョコにしちやつた。ハーシーズは安くいいね。

ミミ、木野の側にからだを寄せる。

ミミ グラウンドゼロ、行つてよかつた？

木野 きみは？

木野 私はよかつたよ。
木野 ならよかつた。

木野 ミミ 私、靈感つてあると思つたことないけど、ちょっと経験したことない感覺だつた。
木野 聞きたいそれ。話して。

木野 ミミ 駅から地上にあがつて、すごく埃つぽかつたでしょ。予想はしてたけど、そこへ向かつてどんどん
　　埃つぽくなるのかと思つて不安になつたのね。ほら喘息あるから。

木野 うん。
木野 ミミ ここで発作出たら困ると思つて…… でもそこに着いたら、そこの中はむしろスッキリしている
　　みたいだつた。

木野 うん。

木野 ミミ 腕の汗腺が開くような感じでふつふつしてね……
木野 鳥肌が立つみたいな？

木野 ミミ 違うの。鳥肌つてやつぱり立つわけじやない？ そうじやなくて開く感じなの。皮膚の穴が開いて、
　　そこらにあるものと共鳴していくような感覺なの。

木野 うん。

木野 ミミ 遠くの方で何か聞こえているような気がして、初めは街の音かと思つた。でも違う。周囲といふよ
　　りは上から、天から小さな音が降つてくるような感じ。よく耳を澄ますと、人の声のような気がし
　　たの。

木野 人の声？

木野 ミミ そう。細かく粉碎された人の声が、風に舞つてゐるみたいな……
木野 すごいなー

木野 ミミ

……。

茶化してるんじゃないよ。そんな風に感じる力がすごいと思って、感心してる。

あそこに立つて『幸福な夢』のこと、考えていた。

木野 ミミ

そうじやないかと思った。

木野 ミミ

大げさかも知れなけど、今あれをやらなきやつて、やりたいって思った。

木野 ミミ

そうか。

木野 ミミ

やつてもいい？

いいんじゃない。

一年くらい、しつかり時間をかけて準備しようと思うの。

木野 ミミ

いいんじゃない。

木野 ミミ

お父さんたち気を悪くするよね。

木野 ミミ

気にすることないよ。

木野 ミミ

もう演出はやらない。制作に専念して…… それなら仕事も一週間くらいの休みでなんとかできる

と思う。

木野 ミミ

俺もできるだけ協力するよ。

木野 ミミ

チラシ作ってくれる？

木野 ミミ

いいですよー

木野 ミミ

ありがとう。でも木野さんは、自分の体のことを一番に考えてね。

木野 ミミ

わかってる。

木野 ミミ

(微笑む)

あのさ、『オペラ座の怪人』どうだった？

木野 ミミ

面白かったよ。

木野 ミミ

え？

木野 ミミ

お客さんがすごく面白かった！

木野 ミミ

なんだよ。

色んなお客さんがいたね。大家族で来てた人たち、ペルトリコ人かな？ まるで運動会みたいな

騒ぎだったね。あとスコットランドの正装した紳士がいたでしょ？

木野 キルトね、初めて間近で見た。

木野 ミュージカルはもういい。次はストレートプレイを見たいな。

木野 そうだね。

沈黙。

木野 帰りたくないね。

木野 そうだね。

木野 ここに住めたらしいのにね。

木野 英語話せないのに？

木野 日本だつて、ほんとのことは話せないよ。

木野 そうだな。

木野 せめて半年くらいいられたらね、すっかり元気になるかも知れないのに。

木野 また来よう。

木野 ぜつたい来よう。

二人、横になりながら会話し、やがて消灯する。

木野 次はどこ行きたい？

木野 エッサ・ベーグル！ ニューヨークで一番美味しいんだつて。木野さんは？
木野 俺はオイスターに行つてみたい。

木野 いいね！ 行きたい！

木野 やつぱシャブリかな。

木野 あとイサムノグチね。

木野 ちょっと遠かつたね。

木野 あとガラスの動物園！ 『ガラスの動物園』を観たいな。

真夜中。木野、眠っているミミを見つめている。

やがて、指をミミの頸にかける。

木野、静かに、ゆっくりと、ミミの頸に両手をかけようとするが……

ミミ きのさん……？

木野 大丈夫だよ。おやすみ。

【第九場】 一〇〇四～一〇〇八年 爆発したんだ

一〇〇四年・一月末の夜。

ミミ 木野さん、明日からもう劇場には来なくていいよ。家でゆっくりしてて。

木野 行くよ。何かやることあるかも知れないし。

ミミ ……来ないで欲しいの。来ないで欲しいっていうお願ひなの。

木野 どうして？

ミミ みんな気にしてるんだよ。木野さんが普通じゃないって、気になってるの。

木野 気にしなきやいい。

ミミ そういうことじやないでしょ！ 毎日お酒の臭いブンブンさせてるスタッフがいたら、気が散るでしょ？ 旦那さん大丈夫なの？ って言われてるの。

木野 そうか。

ミミ すごくいいチラシも出来たし、パンフも出来たし、ありがたいと思つて。賄いも手伝つてくれて助かつたよ。みんな喜んでた。でも明日から本番で、もう大丈夫だから家にいてください。

木野 わかった。

木野、出て行く。

ミミ 木野さんは千秋楽まで欠かさず劇場に来た。

二〇〇四年・初冬。ミミ、電話をかけている。

ミミ　——お義母さん、学さんにお酒を止めるように話してもらえませんか。——そんな悠長なこと言ってられないんです。——お義父さんやお義母さんが考へているよりは、もつと深刻な状況だと思います。主治医の先生から、飲んだ分だけ寿命を縮めるって言されました。——入院して治療した方がいいって言われたんです。でも学さんがどうしても嫌だつて——みつともなくないです。病気なんですから。——反対つてどういうことですか？

二〇〇五年・春。ミミ、眠つている木野を見つめている。

木野　（気配に気づいて）どうした？

ミミ　いい病院見つけたよ。

木野　入院はしないよ。

ミミ　普通の病院じやないの。ちょっと遠いんだけどね、家族も一緒に入院できる施設があるんだつて。海の近くでね。

木野　……。

ミミ　ね、一緒に行つてみよう。

木野　——君、仕事はどうするの？

ミミ　辞めるしかないだろうけど、でも大丈夫。コールセンターはいっぱいあるし、今のセンター、研修がすごく厳しかつたからね。どこへ行つても通用するつて言わてるの。

木野　……。

ミミ　ね、二人一緒ならいいでしよう？

木野　それはできない。

ミミ　どうして？

木野　とにかくできない。嫌だ！

木野、出て行く。

二〇〇五年・秋。ミミ、電話をかけている。

ミミ お母さん、ミミです。学さんのことなんですが、お酒やめることできていませんよ。—— 燃酌だと二日で一本くらいです。乱れたりはしません。—— 強くとも依存症にはなりますから。今治さないと大変なことになると思うんです。それで、私も一緒に入院しようと思うんです。そういう施設があるんです。一人だと見放されたように感じるでしょう？だから奥さんとか親とか、家族がいつしょに寝泊まりできる施設があるんですよ。—— 許すとか許さないとかの問題じやないんですよ！

二〇〇六年・正月の夜。二人、家に帰つて来る。

ミミ どうして？

木野 ごめん。ほんとに申し訳ない。

ミミ 謝るくらいなら、どうしてあの場で言つてくれないので？

木野 ……。

ミミ 木野さんも、お義父さんも何も言わないなんて、おかしいよ！

木野 お袋、たまにああいうことあるんだよ。

ミミ 私に来て欲しくないなら、最初から呼ばなきやいいじゃない！ 呼ばれて行つたのに私の席もお皿もお箸もなくて…… ヒナちゃんが「お姉ちゃんのお箸もつてくるね」って言つてくれなかつたら私、発狂してたかも知れない。お義母さんはひどいけど、木野さんとお義父さんはもつとひどいよ！ そういうの、木野さんがいつも批判してる、鈍感な傍観者っていうんじやないの？

木野の携帯電話が鳴る。

木野 もしもし？ ————— ああ…… ちょっと待つて。

ミミに携帯電話を渡そうとする。

木野 お袋が君に謝りたいって。

ミミ ……。

木野 頼む。

ミミ、どうしても体が拒否してしまう。

木野、あきらめて出て行く。

二〇〇七年・初冬。

ほつと息をつくよう陽だまりの温かさを感じていたミミ、ふと戸外の異変を感じ取る。

木野、ここでは向かいの家の住人、ペットボトルの主として、その窓を開け、ペットボトルの蓋を開け、その液体を空中に散布する。

強いアンモニア臭が漂い、強烈な刺激がミミに襲いかかる。

時間経過。夕刻間近。ミミ、ぐつたりと横たわっている。

木野、帰つて来る。

木野 どうした?

ミミ バクハツした。

木野 ……。

ミミ 引っ越ししよう。こんなとこにいちやいけない。ここから出よう。まだ異臭が漂つてるでしょ? す

ごいアンモニア臭…… この家あちこちに隙間があるから、窓閉めてても防げないんだよね。大丈夫? 気持ち悪くない?

木野、向かいの家の窓の柵にあるペットボトルを確認する。

ミミ　すごい刺激で目が痛い。しばしばするでしよう？　何ともない？　感じない？

木野　……。

木野　ね、引越ししよう。あたし探すから、いいところ見つけるから。

木野　爆発したんだ……！

ミミ　それから私はインターネットで物件を探し、陽当たりのいい一軒家を見つけ出した。木野さんは一緒にその家を見に行つてくれた。調布駅から徒歩二十分、ほんとうに久しぶりに手を繋いでゆっくりと歩いた。途中にロウバイの花がたくさん咲いていて、月の雫を凍らせたような透き通った花びらが

真っ青な空に輝いていた。木野さんはその花がとても好きだった。

木野　ロウバイって蠟の梅って書くけど、ほんとは梅じやないんだよな。

ミミ　木野さんはすっかり瘦せてしまい、ときどき内臓から液体がこみ上げてくると、生きていたものが朽ちていく臭いがした。それでも男の人に於ては小さいその掌からはたしかな温もりが感じられて、このままで……

木野　ごめん。俺もう引越しはムリだよ。

【第十場】二〇〇九年・春

夫婦が暮らす家。土曜日の夕方近く。
ミミ、佇んでいる。

木野　ただいま。君の言う通り病院変えることにしたよ。もう荻窪へは行かない。カワイ先生の所へ通うよ。大丈夫？　疲れたんじやない？　夕飯、ピザでも取ろうか？　そうそう、ノートブックに入つてる書きかけの戯曲、いちおうＵＳＢメモリーに入れて渡すね。使い方も書いておくから。

ミミ　話があるの。

木野　うん。

木野　座つて。

木野　じゃあその前に珈琲入れようかな。飲むでしょ？
ミミ　飲まない。

木野 —— どうした？

ミミ、クレジットカードの明細を差し出す。

ミミ これ、説明してくれる？ 机の引き出しに入つてた。

木野 プレイステーションスリーハード。木野さんが買つたんだよね？ 私のクレジットカードで。

木野 ミミ どういうことか説明してくれる？ 木野さんに渡してた家族カードを解約したから、どうしても必要なときは私のカードを使っていいと言つたけど、無断で使っていいとは言つてない。まず相談してねと言つたよね？

木野 ミミ で、そのプレイステーション三台はどこにあるの？ 見せて。

木野 ミミ ここにはないです。ごめんなさい。

木野 ミミ ちゃんと説明して。木野さんがネットで買つたんだよね？

木野 ミミ はい、買いました。

木野 ミミ それで品物は？

木野 ミミ もうありません。

木野 ミミ どうして？

木野 ミミ 売りました。

木野 ミミ 三台とも？

木野 ミミ はい、三台ともです。

木野 ミミ 残念！ 遊べないんだ。

木野 ミミ ……。

木野 ミミ つまりこういうことかな？ 木野さんは現金が欲しかった。私の留守に私のクレジットカードでキヤツシングしようとしたけど限度額いっぱいで借りられない。で、ネット通販で売れそうなゲーム機を買ってすぐ転売して、現金を手に入れた。

木野 そういうことです。

木野 14万9400円必要だつたんだ。

木野 いや、定価じや売れないと、十万円足らず。

木野 この言葉嫌いだから使わないようにしてたけど……

木野 ごめんなさい。

木野 ——暗証番号教えてたつけ？

木野 いくつか試して、結婚記念日を入れたらヒットした。
(自嘲気味に)私のことよくわかつてたるね。

木野 ごめん。

木野 ミミ これ犯罪だよ。わかつてる？

木野 ……。

木野 ミミ いつだつけ？ わりと最近、うちの母親がお金貸してつて言つてきて、貸さなかつたら詐欺に引っかかつたでしょ。憶えてる？

木野 憶えてる。

木野 ミミ 五十万円融資します。でもそのためにまず保証金として五万円振り込んでくださいってやつ。あんたが貸してくれんかったけんつて散々責められて、吐きそうなくらい嫌な気持ちになつたけど、百倍マシだつたね。

木野 ……。

木野 ミミ で、どうやつて支払えばいいの？ それでなくとも毎月払い切れない金額をどうにかこうにか払つてるんだけどね。この金額、どうやつて払えばいいの？

木野 何とかする。

木野 ミミ 何とかできるなら最初からすれば？ 福岡から借りてくれる？
木野 それはムリ。

ミミ、木野に座布団を投げつける。

ミミ 福岡なんか行かない。行けるわけがない。もう無理だよ。——どうして？ 父親とおんなじ。なん

で？ こんなこと繰り返してたら、いつか木野さんを殺すかも知れない：

木野 殺してくれ……！

ミミ、座布団で木野を叩く。

ミミ——家族揃ってどこまで人を馬鹿にしたら気が済むの？ ほんとにひどいよね。木野家はおかしいよ！ 木野さんが退院して私がうつ病になつて、あなたの親が怒つてるという。夫が大病になつたのに妻が働けないってどういうことだつて怒つてるつて……でも私ずっと働いてきたよね？ 結婚してあたしが働いてなかつたときは何日ある？ それつて怒ること？

木野 ごめん。

ミミ アルコール依存症を治すために私がいつしょに入院すると言つたら、あなたの親はとんでもないつて言つた。そんな可哀そうなことできないつて。ミミさんはヒドイつて。大げさだつて。その結果、木野さんはお酒を飲み続けて、こんな風になつたんじやない。それで肝硬変になつて死にかけたのにお見舞いにも来ない。ミミさんに任せるつて。そんな都合よく任せられても困るのよ！ 木野さんはもう前みたいには働けないし、木野さんだけでも破産宣告したいつて言つたら、それもダメだと言う。世間に顔向けできないつて。バカなんじやない？ ねえ、バカなんじやない？ あんたたちのいう世間つて誰？ どこ？ その間にあなたは私のカードでお金を借りて、借りられなくなつたらショツピングして、転売して現金に替えるつて……どういうこと？ それぜーんぶ私の名義なの。わかつてる？

木野 はい。

ミミ どうせ破産しなくたつて自分が死ねばチヤラになるつて思つてるんでしよう？ 私じやなくて木野さんが思つてるのよ！ うちの母とおんなんじ！ でもあたしはそういう生き方は嫌なの！ したくないの！ 私は木野さんが残した借金を返すよ。私の人生はそれで終わりよ。今すぐ離婚したつて私は三百万返さなきやならないのよ！ 月に五万返して年に六十万、どんなにがんばつても五年はかかる。五十近くなつて、ようやくまた芝居のことを考えることができる。もう遅すぎるかも知れない。

木野 大丈夫だよ。

ミミ うるさい！ でも書くことはやめない。どうしてかわかる？ そうしないと自分が生まれた意味がないからよ。意味なんてなくてもいいのかも知れない。でも書きたいことを描かないと。あたし本気

よ！ 五十になつて芝居書いて、東京に住めなくなつて、そしたら高知に帰るわよ。四十川に帰るわよ！ 四十万川の河原に掘つ立て小屋建てて、へんな女が棲みついてるつて言われても構わない。ここで何してるんだつて言われたら、ギキョク書いてるんだつて言つてやる！ それで行き倒れになつて、四十川に浮いてたら本望よ！ こんなところで息をひそめてるより百倍マシ！

木野、笑いだす。

木野 ごめん、バカにしてるわけじやない。君ならやりかねない気がして…… やっぱり君は強いんだよ。

沈黙。

木野 なんで戻つて来たの？

ミミ ……？

木野 あの時、サキちゃんのとこからなんで戻つて来たの？

ミミ ……。

木野 戻らないつもりだつたんだよね？ 何かが変わらなければ戻れないつて言つて君は出て行つた。でも半年経つて何も変わらないのに戻つて来た。ごめん、戻つて來てもいい？ つて……君が帰つて来たのは嬉しかつたけど、正直戸惑つた。どうして？

ミミ ——共依存だつて言われたの。

木野 キョウウイゾン？

ミミ お互いに依存し合つて生きてるつて……

木野 共依存ね。

ミミ 別居してるのに今までと同じように集まりに来るのはおかしいつて言われて…… 木野さんはあんまり人前に出さない方がいいとか言われて……

木野 人をバケモノみたいに……

ミミ 辛かったの。誰も味方がいないような気持になつて怖くなつて…… でもどこにも行くところがなかつたの。

木野 ほかには？

ミミ 家族がアルコール依存になるのは、側にいる人の責任もあると思うって言われたの。

木野 あなたはどう思うの？

ミミ 責任があるって思ってたよ。だから自分に出来ることは全部やろうって思った。でももうやり尽く

したと思う。もうできることがなくなつちやつたの。

木野 いるだけでいい。そばにいてくれるだけでいいよ。

間。

ミミ わかつて言つてる？ 側にいるだけでつて、本当にその意味がわかつてる？

木野 ……。

ミミ 私の感覚ではね、それはものすごく罪深いことなの。

木野 ……。

ミミ 今の木野さんはね、ゆるやかに自殺してるんだよ。そつちへ進むと命が削られるとわかつてるのに、そつちへ向かっていく。私はそれを止めることが出来ない。側にいて見守ると言えば聞こえはいいけど、それって自殺ほう助と同じじゃない？

木野 それは違う。

間。

ミミ 木野さんはうちの父親みたいに暴力的ではないけどね、そんな体になつてまでお酒を飲んでいるのを見ると、色んな所にお酒を隠してまた飲んでるんだってわかると体が痛いの。痛くて苦しい。——私が自惚れてた。絶対なんとかできるはずっていう私の思い上がりのせいで、こんなところまで来てしまつた。こんな遠くまで……もつと早く手を離してあげればよかつた。

木野 ……。

ミミ 私は木野さんを救うことはできない。でも、私は私を救うことはできるかも知れない。それをしなきやいけないと思うの。

間。

木野 —— そうだな。

ミミ ……？

木野 そうだよ。君のせいだよ。俺がこうなつたのは君のせいだよ。君は人を追い込むんだ。君の正義を振りかざして追い詰めるんだよ。俺だけじゃない。だから君のあの人だつて逃げ出したんだ。追い詰められて逃げ出しあくなるんだよ。だから、けつきよく君は一人になるんだよ。だから……

ミミ、ポロポロと涙をこぼしながら、木野の言葉に隠された本当の意味を探している。

木野、出て行く。

*

日曜日・未明。

木野、眠つてゐるミミを見つめている。
やがて、両指をミミの首にかける

木野、静かに、ゆっくりと、ミミの頸に両手をかけるが、やがて手を離す。

ミミのうなされる声が聞こえてくる。

木野、ミミの名前を呼びながら起こそうとする。
目を覚ましたミミ、子どものように怯えている。

木野 大丈夫。夢だよ。
ミミ お父さんが……
木野 またお父さんか……

木野、しっかりとミミを抱きしめる。

ミミの手が木野を求める、二人はしつかりと強く抱きしめ合う。やがてミミが安心したように眠ると、木野は持っていたなにかをミミの側に置いて去っていく。

*

朝がやつて来る。

ミミ、目が覚め、自分がどこにいるのかを確かめる。

ミミ、側に置かれた『ガラスの動物園』の文庫本に気がつく。

ミミ、起き上がり、木野の姿を探す。

木野の姿はどこにもいない。

打ちひしがれるミミ、やがて駄々をこねるように叫ぶ。

ミミ、行きたくない。行きたくない。一人になりたくない。怖い。行きたくない！　ここにいたい！　木野さんと一緒にいたい！　一緒にいたい！

追憶の灯りの中に、木野の姿が現れる。

木野、酒を飲んでいる。その姿を見つめるミミ。

ミミ、大切な友人で大切な仲間だったサトウくんが突然死んだのは二〇〇一年の夏でした。ひとり部屋で亡くなつていて、自然死ということでした。その頃の私はひどく調子が悪く、一年近くほぼ寝たきりのような生活だったのですが、サトウくんの死という、あまりに衝撃的な出来事が眠つっていた神経をたたき起こしたかのよう、活動を始めました。私と木野さんが初めてニューヨークに行つたのは、その翌年、二〇〇二年の五月の終わりでした。もしかしたら、もうここへ戻ることはないかも知れない：そんな心境で、この家を出ました。でもエンパイアステートビルに入つたのに、私は逃げ出してしまつた。——私たちが最後にニューヨークに行つたのは二〇〇五年の夏のことです。そのときは、確実に、お互いこれが最後のニューヨークになるだろうと感じていました。私はブロードウェイで上演される『ガラスの動物園』のチケットを予約して、飛行機のなかでずっと『ガラスの動物園』を読

んでいました。——英語がわからなくても全部覚えちゃえばいいんだから！

ミミ、劇場の椅子に座っている。

ミミ その夜の席は、舞台と同じ高さくらいの位置のちょうど真ん中。私の一番好きな席です。演出はデヴィッド・ルヴォー。アマンダ役はジェシカ・ラング。あの日、今見ている芝居からエネルギーを得て、自分のからだに新しい力が満ちていくのがわかりました。

ミミ、ニューヨークの街角を跳ねるように歩く。

ミミ わかったの！ どうしてうまく書けなかつたのかわかったの！

木野、微笑みながら酒を飲んでいる。

ミミ 今までセリフが一番大事だと思つてたの。さつきの舞台、幕が上がつたらセントルイスの街のにおいがしたの。ミシシッピ川とミズーリ川の合流する街のにおい。油と煙の混ざつた少し重苦しい風も感じた。もちろんセリフは大事だけど、それだけじゃダメなのよ。描こうとしている世界全体の空気を伝えることが大事なんだと思う。

木野 (呟くように) このまま二人で、いられるだけここにいようか……？

ミミ 私、早く帰りたくなつちやつた。今までよりうまく書けるような気がするの。

木野、微笑みながら酒を飲んでいる。

ミミ その夏の終わりから秋に向かつて、私は仕事から帰つて食事と睡眠以外はずつと書き続けていました。金曜の夜は土曜の朝方まで、土曜日は日曜の朝方までずっと書き続けていました。

ミミ、二階の机に向かい、戯曲を書いている。

木野、一階で酒を飲んでいる。

木野、降りてくる。

木野 私は朝まで起きてると思うけど、木野さんはちゃんと眠つてね。一緒に起きてなくていいんだからね。あんまり飲み過ぎないでね。

木野 わかつて。でも、そろそろお風呂にも入った方がいいよ。

木野 そう？ 臭う？ ジやあ明日入る。

木野、酒を飲んでいる。

木野 (階下へ向かって)まだ起きてるのー？

木野 もう寝るよ。

木野 おやすみなさい。

木野 おやすみー

木野、酒を飲んでいる。

木野 私が書いている間、木野さんはずっとお酒を飲んでいる。早く終わらせないと木野さんが死んじゃうかも知れない。早く！早く！

木野、飲み続いている。

木野、再び書き始める。書きながら、木野の思いが、嫉妬が、執着が体にまとわりついて離れないような苦しい気持ちになる。

木野、たまらず駆け下りてくる。

木野 もう寝るって言つたよね？ 起きててもいいけど、ずっと飲むのは止めて。からだに良くないよ。

木野 ごめん。もう止めるから。

ミミ　心配で落ち着いて書けないよ。

木野　ごめん。でもなんか嬉しくってさ。

木野　何が？

木野　君がまた書けるようになつたことがさ……寝たきりだつたのにな。

木野　よかつたな。ほんとよかつた。

心底うれしそうな木野の微笑みが、ミミの胸に突き刺さる。

ミミ　ありがとう。

木野　もう寝るから心配するな。大丈夫だから。

木野　大丈夫？

木野　大丈夫。

木野　おやすみ。

木野　おやすみ。君も無理するなよ。

木野　うん。

木野、酒を飲み続けながら、やがて静かに横たわる。

*

ミミ、どうして出て行かなくてはならないと決意したのかを思い出した。やがてミミが旅立つとき、木野の姿も消えてゆく。

終